

Raffiné Journal vol.02

世界観の質

Raffiné

同じ場所に立っていても、
見ている世界は、少しずつ違う。

声の大きさでも、言葉の数でもなく、
どの深さで、世界に触れているか。

その差は、静かに滲み、
やがて関係の輪郭を変えていく。

最近、
人と話していて、ふと疲れる瞬間が増えた。

言葉は交わっているのに、
どこかで噛み合っていない感覚。

以前は「相性」や「性格」の違いだと思っていた。
でも、それだけでは説明できないズレが残る。

同じ話題を前にしても、
ある人は出来事そのものを語り、
ある人は、その背景や構造を見ようとする。

どちらが正しいわけでもない。
ただ、世界への触れ方の層が違う。

その違いに名前をつけるなら、
私はそれを
「世界観の質」と呼びたい。

肩書きや立場を聞いた瞬間、
相手の態度が変わる場面に立ち会うことがある。

尊敬でも、遠慮でもなく、
ただ距離の測り方が変わる。

その変化を、
私は少し遠くから眺めてしまう。

誰であっても、
その人が見ている世界の深さのほうが、
私にはずっと重要だった。

賑やかな場にいても、
突然、音が遠のく瞬間がある。

言葉が軽く、
感情が速すぎるとき。

その場にいながら、
自分だけ別の水深に沈んでいるような感覚。

そこでは、
無理に浮上しないほうが楽だと、
最近になってようやく気づいた。

不思議なことに、
ごく稀に、説明のいらない人に出会う。

多くを語らなくても、
沈黙が不安にならない人。

その人とは、
会話の内容よりも、

「見ている世界の深さ」が
自然に揃っていく。

世界観の質が合うとは、
きっと、こういうことなのだと思う。

世界観の質は、
優劣ではない。

ただ、
世界をどの深さで受け取り、
どこまで内側で咀嚼しているかの違い。

質が違えば、
会話はすれ違い、
沈黙の意味も変わる。

無理に合わせることはできる。
でも、その時間は、
どこかで消耗を生む。

だから私は、
この質を下げないことを選びたい。

静かで、深く、
透明なまま、世界を見ること。

それが、
これから先、自然に残る場所へ
私を運んでくれると信じている。



世界観の質は
声ではなく

沈黙の中で
そっと伝わっていく —

R.

Raffiné Journal — vol.02

著者：美学思想家 古川玲奈

発行：Raffiné

2026